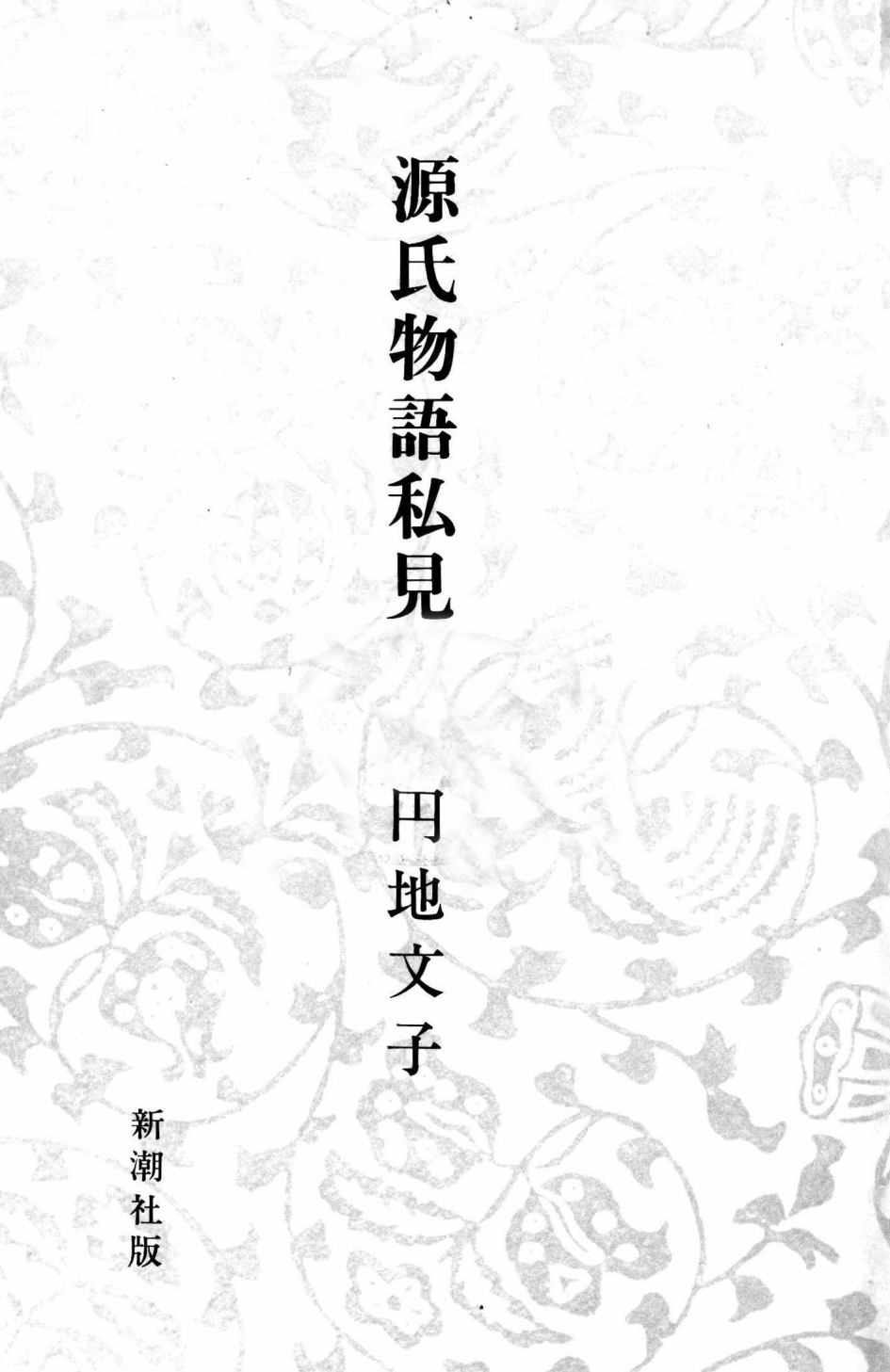


円地文子

源氏物語私見

千年の風雪に耐えて生きぬいた源氏物語は
1970年代 人間 が復活しはじめた年
名訳 円地源氏 を得てまた……
新たなる世紀に読みつがれる。

これは、全五十四帖の完訳をなしとげた著者半生にわたる、熱く、烈しい、源氏物語体験の全貌である。読書百遍、おのずから見きわめる哀しい人間の宿命と人生の意味が、そのまま、源氏物語の偉大さを物語る。

The background of the entire page is a repeating floral pattern in a light gray or beige tone. The pattern consists of stylized flowers, possibly peonies or similar large-blossomed flowers, with detailed petals and leaves. The pattern is dense and covers the entire surface.

源氏物語私見

田地文子

新潮社版



© Fumiko Enchi,
Printed in Japan,
1974.

げんじものがたりしけん
源氏物語私見

価七五〇円

昭和四十九年二月十五日 印刷
昭和四十九年二月二十日 発行

著者 円地文子

発行者 佐藤亮一

印刷所 株式会社金羊社

製本所 株式会社大進堂

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
郵便番号 一六二
電話 東京(03)二六〇一—二二
振替 東京 八〇八番

(乱丁・落丁のものは、本社またはお買
求めの書店にてお取替えいたします)

源氏物語私見
目次

桐壺に見る恋愛	11
空蟬の顔かたち	15
夕顔と遊女性	17
恋人の位	22
賢木の巻	25
朝顔の斎院	29
源氏物語の端場	33
源典侍考	36
「われながらかたじけなし」の思想	41
頭中将考	45
女にて見奉らまほし	57

光源氏と初、中、後の恋 61

恋の仲立ち 68

年上の女 72

紫の上のヒロイン性 76

近江の君の滑稽味 80

罪の意識について 84

女二の宮 99

ホームドラマ 103

歌のない女 107

六条御息所考 111

三人の女主人公―匂宮・紅梅・竹河 137

宇治十帖についての私疑 141

仮名文の文体など 152

口語訳の言葉あれこれ 159

源氏物語紀行

住吉詣で 165

住吉と遊女 169

嵯峨あたり 173

光源氏のモデル 176

作者の声 180

源氏物語の魅力

源氏物語は女の文学か 187

源氏物語を書かせたもの 198

光源氏と女性群像 207

源氏物語の構造 222

源氏物語を生き継がせたもの 236

源氏物語は何故訳されるか 250

あとがき

源氏物語私見

亡き友津田節子に捧ぐ

源氏物語私見

桐壺に見る恋愛

「源氏物語」をこれまで読んで来たけれども、それは好きに委せてのことで、机に向つて学習したことは一度もなく、欄外の注などを辿り辿り、いつか自分よみの「源氏」にしてしまつていたのであつた。

口語訳をすることになって、初めて、本文の一句一句に當つて見て、兎も角も正確に解読した上に、自分流の意識も加筆もして見ようと心を決めてから、そのつもりで読み直して行くと、あらためて、氣のつくことも多く、これも又、私の手前勘なのかも知れないが、思つたままを書き記して置くのも何かの榮しよりになるかも知れない。

光源氏の恋愛遍歴が、顔も覚えぬ幼い時に死に別れた美しい母に対する憧憬を根としてゐることは今では定説になつてゐるし、その母代の恋愛感情の對象として、藤壺ふじろの宮との密かな愛が一篇の芯になつてゐることもその通りである。

藤壺、紫の上、女三の宮とつながつて行く所謂「紫の物語」の系譜に「源氏物語」の本流のあることは私は早くから呑みこんでいたが、冒頭の「桐壺」の巻については、光源氏の出生や

生い立ちを印象づける為に描かれた序章のようにしか見ていなかった。

しかし、「桐壺」を細かく読み直してみて新たに気づいたことは、これは、単に帝と寵姫との間の、愛を与えるものと受けるものの関係ではなくて、愛し合う二人の男女とそれを許さないう周圀の厚い壁との間に醸し出される、きらびやかではあるが暗い闘争の劇であるということだった。「桐壺」には玄宗と楊貴妃の恋愛を歌った白楽天の「長恨歌」が度々引用される。確かに帝が更衣の死を傷む恋々の情を叙した部分には「長恨歌」の影響は生々しく滲み出ているが、勿論、当の更衣は楊貴妃のような権勢を恣にする性格ではない。いやこれまで、私はむしろ更衣を、夕顔に近い、いたいたしいほど可憐な、男の愛情に湿おってのみ花ひらいているような女性に感じていたのだが、それが私の読み方の未熟だったことにあらためて気づいた。

更衣は帝に熱愛されたに違いないが、愛されることだけに生きたのではなくて、自分も帝を愛し、愛すことの深さによって他から輕蔑されたり迫害されたりする苦しみを精一ぱい耐えて、宮仕えをつづけたのである。

かしこき御かげをば頼み聞えながら、貶しめ、傷を求め給ふ人は多く、わが身はか弱く、物はかなき有様にて、なかなかなる物思ひをぞし給ふ。

この「なかなかなる物思ひ」の内容には、清涼殿に通う道々の廊下の戸を両方から閉めて立

ち往生させたり、汚物を床に撒きちらしたりするような具体的な厭がらせもあれば、「かかることの起りにこそ、世も乱れあしかりけれ」と、国を乱す妖婦扱いした穩おだやかならぬ陰口も交っている。しかも、その原動力は権力者の右大臣家であつてみれば、更衣がほんとうに夕顔のようなものはない女であつたらば、どんなに帝に愛されていたとしても、自分から身を退いて行つてしまつたであらう。

元よりここは「源氏物語」の発端として描かれているので、更衣が夕顔であつては話にならないのだが、普通に考えられている以上に周囲の攻勢に対する抵抗は更衣の側で強くなされていることを私は言いたいのである。

そうして帝と更衣との結びつきが宮廷全体の「ゆるしなき」雰囲気を押し切つて帝が自らの地位をさえ賭けているように見えるところに、單なる宮仕えの主従関係を越えた、一對一の戀愛を感じるのには私の思い過しであらうか。

私はそうした理解を援たすける一つの例として、更衣が死の前に帝と別れる件くだりの二人の對話を挙げたい。

(帝)『限りあらむ道にも、後れ先だたじ』と契らせ給ひけるを、さりともしうちすては、え行きやらじ』

とのたまはするを、女も、「いといみじ」と見たてまつりて、

「かぎりとして別るる道の悲しきに

いかまほしきは命なりけり

いとかく思う給へましかば」

と息も絶えつつ、聞えまほしげなることはありげなれど……

とあって、ここに、更衣の言葉として、自分のあとに残して行く幼い源氏に対する母としての悲しみや不安は一言も語られていないのである。

これが徳川時代の「源氏」のアダプテーションである柳亭種彦の「田舎源氏」になると、この件で、更衣に当る花桐にその子との別れを演じさせている。江戸時代の戯作者の神経では、愛妾が病氣にかかって主人の御殿を下る時、自分の生んだ若君に別れを惜しむことは当然なのであった。

更衣の場合にしても、帝との愛情が切羽つまったものでない限り、ここに自分の生んだ幼児への名残り惜しさが顔を出して来るのが自然な筈である。それを敢えてさせていないところに、この心憎いまでに行き届いた作者は、親子の情よりも、恋愛感情の強さを強調したかったのだと思う。そうして又、この稀に深く結ばれた二人の愛情から生れ出たものとして、光源氏の魅力がこの世のものとも思われぬほどに輝かしいことが、当然予約されてもよいのではないだろうか。